加羅疆域考補遺

文學士　今西龍

本誌前號に掲載せる「加羅疆域考」中に、加羅多沙津は今の昆陽泗川間の海港なるべしと說きしが其の後尙ほ調査を進むるに及び、大加耶の地たりし高靈より海港に出づるには高靈より居昌、安義の方面に出で、咸陽、雲峰を經て、膽津江に出づる交通路極めて良好なることを知れり。加羅多沙津は從來の說の如く膽津江下流とするを可なりとす。これによりても、此の津を百濟に與へられしにつきて、此津從置官家爲臣朝貢要津とて抗議せし加羅王は高靈加羅の五なること益明なり。

尙ほ新羅統一時に於て、今の開寧、金泉、知禮と全羅道茂朱とは一行政區劃たりし事あり。是れ明に百濟が巳汶の地方として、此等の地方を一行政區劃として領有せしを、新羅が繼承せしものなるべし。又加羅疆域考に於ては喙字の調査不充分なりしが、喙は喙の一異字にすぎざること、喙は字音「カイ」なるべきも、啄と混用して、「トク」或は「タク」と讀みしこと、梁字の訓は水橋、水堰の義にて、「トル」なるも、古くは「ト」なるべきこと居曾山は居昌附近なるべきこと、伊湌比助夫は三國史記居柒夫傳に比次夫大阿湌とある人と同じきこと、漆原の武陵山城は何の牟羅山城の牟羅の名のみ殘りしものなること、水は最も古き語は「ミ」にして、火の最も古き語は「ホ」なるべきこと等、修正を要すること多し。（十一月下旬）